

城代及び  
城番

第一の堅城と稱へらる。その明るくて輝き渡る塔と高き女堞と彌深き壕とは行く人をして坐ソバに昔此地にありし世界的高名なる武將の築きし○今よりは五倍も大なる城池を十分に想ひ起さしむ。大阪城は將軍府幕の一大官の命令の下に立ち。其大官は御城代ゴシヤウダイ Gosjodai○大阪城代と稱へ、多年代りなくこゝに支配し○此時の城代は文政八年より同十年。城自身は將軍に厚き信任ある三諸侯の軍兵にて之を守る○城代その他二人の御定番を云ふ年より天保七年まで在職の大久保出雲守教孝及び文。政元年より同十一年まで在職の山口但馬守弘致なり。第一の部署は表口オモテグチ Omotekutsi・第二の部署は京橋口キョウバシキグチ Kiobasikutsi・第三の部署は玉造口タマゾウグチ Tamatsukirikutsiにつ。此部署に屬する兵卒・士官は城と市との界なる地區に住居す。御城代も城の外に壯大の官邸を有し、それを御城代屋敷ゴシヤウダイヤシキ Gosjodai-jasikiニ云々。大阪市は他の將軍○直屬の都市と同様、二人の町奉行と一人の代官とにて支配す。町奉行は交代して大阪市政の支令權を握り、一方は東御町奉行マチブギョウ Higasiomatsibugjoと云ひ、他方は西御町奉行ニシノマチブギョウ Nisino-matsibugjoと云

ふ○即ち東西の市知事なり此當時西は文政三年より十三年まで在職の高井山城守基徳。東は文政三年より同十二年まで在職の内藤隻人正矩臣なり。兩町奉行とも城より遠からず、市の東北部なる大邸宅に住し、司法と警察とを司ツカサどり。代官は財政を管掌するなり。役人の數は著しく多く、市中には頗る多數の官衙あり。

全國の寶貨が此處に堆積する程の著大なる商業市に於ては、多方面の犯罪事件あり。されど日本國民の名譽を傷くると云はねばならぬ様なる眞個の悪業者は稀にして、一年間に大阪市に於て凡そ百人を數ふるのみ。此國にては死刑に處せらるゝ罪人は、普通の死刑の他、前には竹鋸斷タケノコトキ Takanokobiki○即ち木の鋸にて頸を引切る○さるゝことありたり。是れ酷だしき死刑にして、鋸は脅嚇の道具として罪人に見せつくるのみ、鋸斷を實行するは決してなきか、あるも極めて稀なりしなり。斬罪後の首は時として三日間公けに晒すため、木杭の上に挿し置くを例とし。それを獄門ゴクモン Gokumonと稱ふ。此大都には火災も多く、殊に冬に多

刑罰



し。屢々一日に二十四回を數へたり。

大坂市が適幸なる位置を占むるといふべきは、一方淀河に貫流せられ他方(西南)海に浸さるゝによるなり。本々大坂は商業都市として一大要地たり市には二港あり。其の一は大きくして木津川の河口にあり又一つは安治川の河口にあり。甲は四國九州日本(○本土の)東岸よりの船舶の入る所にして、乙は四國中國の船舶の入る所とす。安治河口の港は淺くして大船を入れぬ故舟航には甚適好ならず。されど安治川木津川に乗入るる船の數は夥くして、平均千隻の大小船舶がいつも大阪の港に停泊すると思ふてよし。大坂市は日本全國の内地貿易の中心地なり。各州の最優れたる産物は此に輻輳し來りて、また全國各地に分配送致せらる。外國貿易は内國貿易と比べては左程ならぬも、この製銅事業は外國貿易の本源と見るべし。此市の商人は江戸堺の商人とともに和蘭人支那人のする輸入貿易につきて、其特權による利得

大坂の輻輳する船

大坂の富

もあれど、その最大の配當を占取するなり。○江戸・京都・大阪・堺・長崎・商人は糸割付製糸貿易につき特別の權能ありたるなり

大阪の富は日本の他の都市に大に超越せり。富有なる銀行家及び爾餘の代理人の名稱は頗る多く、此財界の人々は、大部分諸大名に對する貸付に關係あり。債權者として日本にては割に低き六乃至八分の利子にて生活す。余が大坂滞在中に爲替方平野屋五兵衛 Hiranoya-Gohe ○高木氏。元祿四年幕府より爲替用達のため選定されたる兩替屋十家は十人衆と云はれ平野屋は其一ツにして薩摩藩及び小倉藩の掛屋即ち今日の所謂金融機關たりしなり(中村氏元祿時代觀) 倉 Kokura の大名 ○小笠原藩 にせし貸付は黄金十萬枚(凡そ一百万ギルデン)なりと聞きたり。本来大坂は大都府京都の近くにあるより、幸好の影響を受け。現將軍の治下たる都府の米穀の倉庫と認むべし。

大坂の市場

記し漏す能はざるは、此市の米庫及び大市場なり。中にも名高きは堂島 トshima の米市場 ○今は米穀取引所 北濱 Kitatama の手形取引所 ○雜喉場 Sakoba の魚市場 ○天満 の青物市場等なれど。優れたるは飢饉戰爭の時のために置きたる將軍家の大米藏なり。大阪に於ては、その商品を悉く、生活必

シーボルト 江戸参府紀行



娯樂機關

需品をも國中第一等の本場より仕入るゝために、廉價に生計を立つべし。大阪には娯樂機關は充溢する程に集まりてあり。而も將軍の治府に行はるゝ如く生活の充盈たるより嫌厭を生じ、嫌厭の通弊たる驕奢の起り來ること之なし。されば國民的娯樂場は江戸のそれよりも鮮麗なる光彩を以て發現し。數多の劇場、茶屋、料理屋は人々を滞留するために招き寄せ、舟の遊山種々の見世物、道化師、手品師、みな各々一般的娯樂に關與するなり。市内の巨利名祠は本願寺 Hongwanji、天満天神 Tennatenjin、天王寺 Tennoji、高津 Kodis、住吉 Sumijoi にして、住吉は大阪より參詣するもの頗る多數なるも、本來は堺 Sakai 領に屬す。

寺社

六月九日 ○我々 余の研索に入用なる物品の買入注文に日を過す。  
六月十日 ○我々 我等は市内にある二三の寺社に行く。今日は正に旗祭 Flaggenfest たる五月の節句なり。町通りも人々も甚だ慶賀の式飾をなせり。大店小店には荷物商品を見物さする爲に趣味多く積列べ

心齋橋

たり。我等は心齋橋 Brücke Sinsai を越えしに、市はこゝに美しき數々の遊園を置き又賣買を目的としたる名高き殖林を設け、そこを市の終端とし。土地はこゝにて打開けて廣濶なる平野となるなり。時は正に小麥の收穫に當り。刈取るあり、根とも引抜くあり、かくて後に竹にて作りし櫛○形の機械に載せ、穂を梳取りて、藁を損せぬ様保存するなり。穂は日光に乾かし掃車にて選り分け。穀物を粒々として取入るるなり。我等は植木を賣る村を過ぎしが、今正に竹の植付を見たり。六月は其最もよき時節なりと云ふ。尋ぎて天下茶屋 Teatja の茶店に憩ひ、昔し有名なる太閤が休憩せりといふ園中の一小亭を見たり。

天下茶屋

それより穀圃を過ぎて難波屋 Naniwaja と云ふ茶店に赴き。葉張の廣き一大松樹(周廻百三十五步)を園藝術上の稀有なるものとして見せられ。次に住吉大明神といふ神道の祠に詣でたるに、神に仕ふる婦人たち神樂 Kamikagura へ舞踊を執行し居たり。

住吉

シーボルト 江戸參府紀行



此祠より我等は廣濶なる穀物の野を行く、主として小麦の別種、瓜、大豆、大根、其他數種の野菜を栽えたり。土地は砂地なれど、絶間なき勤勉と人工的の保助はこれを此くも豊饒としたるなり。

土地に灌ぐには流動の肥料を用ひ、その肥料は農家の一族より最も多くこれを集め、又通路に桶を置いて通行の旅人より之を集むるなり。池を掘り、牽汲井戸を取付けて、灌漑のために十分の水を備ふ。

天王寺

我等は尋いで天王寺 Tennyoin に至る。此邊の最も古き佛寺にて、その建築は最も古き時代よりの神社建築の様式なり。こゝに全然木にて作りたる壯大なる寺塔あり。ドクトルピュルゲル君及び余はそれを第四階迄登りたるが、それ迄七十七段ありたり。塔の中央に船の大帆柱に似たる極めて太き木を樹て、それを堅固なる支柱となすが如し。余は全建物の高さを百二十尺と推測したり。塔の上よりは平夷なる地方に俯して、絶佳なる遠望あり。地上には幾多人々の蠢動○するを

植木屋  
動物商

見降しオカその一部は寺に詣づる市人にして、また一部は收穫に従事する農民なり。我等はその近くなる物優しき茶屋に晝食を取り○次の頁に記す江戸行一件

り。途中二三の植木屋を訪れ、又生きたる動物を賣る町通りを過ぎたり。○かゝる町筋は今日。植木屋にてたゞ少數の余に興益ある草木を見たる何人の知るものなし。

のみ。日本の植物の商人が各季節に其園木を植替えて、而も草木が之に慣れて萎みもせぬは、余の解し兼ねることなり。職人がかゝる草木を植置く土地は、彼植物に取りて全く一時の安息地にして、時としては僅數日或は一夜だけこゝに其惠澤を受くるのみにて、次の日には既に掘出して、賣らんがために荷ぎ廻はらるゝなり。動物の中には興味ある山羊の他に、熊、鹿、猿ありたり。余は前にこゝにて狼 Okame 一匹と豺 Jama-inu 一匹とを買入れたり。此等野獸の飼養、賣買は盡く穢多と云ふ最下級人民の従事する所なり。



大坂の滞在

六月十一日○我五  
月六日正午に兩町奉行○町奉行へ面謁の次第につきて享和二年紅毛人江戸に  
参禮記事に載するところは京都に於けると同様なりに謁見する日割なり。我等は數多町内を通り行きし後、こゝに京都に於けるより遠隔にありし彼等の住居に到達せり。謁見は常例の如く行はれ。其後は日本流に饗應を受く。それより和蘭及び支那の商館に銅を出だす商人某を尋ね。鑛アラカネより桿アサギに鑄るまで各階級の銅の製方を見る○寶曆七八年のものながら江戸行、件書留を見るに江戸下所々見物書付之内に大阪滞留之内天王寺  
（但茶店に立寄申候）住吉社（但新波屋に申茶店に立寄申候）銅吹所・洋瀨茶屋（但此所にて中食仕候）  
からくり芝居・右者歸之節阿蘭陀人見物仕候とあり。  
シーホルトはカラクリ芝居の代りに角座芝居を見たり。同人はいと富める人にて、全く歐羅巴風に接待し、和蘭風の食具をさえ供ふ。彼は和蘭人の友として製銅の小冊子アラカネに鑛より精製したる銅棒まで各級の美しき製品の蒐集を添えて余に贈りたり○此時代大阪にて蘭法にて製銅をなし。製銅につき書物など出せるは住友氏なるべし。文化文政の頃蘭人は度々住友家を訪問せりといふ。シーホルトの見分せしも住友家なるべし。その頃の當主、住友友聞は同家第代の子主にて、京都岡村氏より住友家に入りて、その家を継ぎたるなり。當時同家の家政頗る困難なりしが、同人は只よく事業を整理し改革を謀り、家運を復興せしめたりと云ふ。弘化二年十一月退隱して、子友視嗣ぎ。嘉永六年六月六十七歳にて死亡したり。其後住友家にて鼓鈿圖録と題する製銅に關する書物を出版したり。シーホルトの貰ひしは此書物なるべし（湯  
寛吉君報）此書は余を幸田の友君より借覽せり。

鳥店

至りたるが、二三價甚貴かりし鶴及び鷹の他には、特別の物もなかりき。夜遅く宿りに歸りたり。

芝居

六月十二日○我五  
月七日我等は是日大阪の名高き劇場を見たり。入口は數個の場面を疎く描きたる畫額にて飾られたり。聞き路は見物席に通じたるが、見物席はかなり廣く、我歐羅巴の劇場と同様の造りなれど。造にして飾なければ、我芝居小屋の骨組だけと思ふべきものなり。いつも清潔にして温雅なる日本人も、こゝにその特性を失ひたるが如きは、劇場主事の懈怠によることなるべし。こゝには我邦と同様 Parterre ○高 Parterrelogen ○高 Ranglogen ○高 の區別あり。我邦ならば步廊 Galerie を置くべき廻廊は日光を容るゝために打開けたり。興行は夜明りを點けてせず、朝より終日開場する故なり。土間には左右に橋がかりの花道ありて。演戲中役者が舞臺に登り又舞臺より去るに用ひ。そのため土間は場面によりては舞臺の一部となり、見物は役者の下に居るな



り。これ役者の登場又は襲撃を演ずる際などに、役者が突然土間の背後より舞臺に向ひて走り來るによりて大層な見榮となり、其他種々の場面によき前技マヘワザをすることとなるなり。

我等は土間に入りて座につりきたり。初めに疎末なる音楽あり。樂器は支那流にて太鼓と笛となり。凡そ十五分も續きたらん、尋きて一人の役者立出で、暫時の口上にて舞臺は開かれたり。妹背山 *Inosefama* と云へる人の熟知る劇なり。多勢の役者中には第一流の藝術家もあり。何れも歐羅巴にても一般の賞讃を博すべき人々なり。彼の面貌彼の音聲は眞に國民性を發揮し、時に情緒の作らざる發表と相待ちてよく相ひ調和したるは、十分歡賞するに足れり。價貴き衣装は人の感賞を増さしめ、吾人をして劇場の設備の不完全なるを忘れしむるなり。登場の役者は男子のみなれば、彼等は如何によく婦女たる風度コナシに練習ナラひたればとて、演技の上に損失あるを免かれず。殊に晝間のみするこ

劇 妹背山の

となれば、日光の下には、男子に女子の優麗な刺戟に代はる程の技巧はあらず。されど日本の舞臺に於ける演技が之に妨げらるゝことの少なきは、其役々は若き娘たること少なくて、大抵は瘦衰へ皺枯れたる高貴の老婦人を装ふが故なり。男俳優は生活の放埒ハルカなるより、憐ハレに衰へて弱々しく見ゆるからに、歐羅巴にて考ふるよりはよく其役に嵌まるなり。舞臺は歐羅巴のに似たるに、幕は上より落りずして、左右より真中に引かるゝ故、幕の終毎に役者は早くも見物人の目より掩はるゝなり。舞臺の粧飾は出し物の性状によく適當し。そは色々の家具を集め合せたるなり。張物 *Couliessen* の進退はなく、舞臺の床は廻轉床にて水平に移り、それにて舞臺面の装置は逸早くも交換さるゝなり。舞臺の兩側に竹簾にて圍ひたる棧敷オチヨあり、その片方に一人の俳優ありて淨瑠璃を語り、希臘の合唱歌の如く、演戲の間隙アヒマに挿みては、仕草につきて細かに物語るなり。これを淨瑠璃語り *Sjororikatari* と云ふ。他方







が悲しみ歎くを見つゝ、その事由をも問はず。我家に在すミカドの傍に近づけば。侍臣どもは老夫が罪を許されて、酔ひて歸れるに思ひ惑ひ、互に秘したるミカドの隱家を訴人せしにはあらずやと疑ひて。ミカドを掩ひ隠せしかば。老たる狩人は我忠義の心底を明かして、その疑を晴らすには親身を犠牲にする他なしと思ひ込み、わが實の子たる弟の子を刺さんとしければ、母は弟までも死に更に又歎き悶えて打仆れたり。父はこゝに初めて兄の子が自首をさし知りて、驚き狂ひ、刑場の方に駈出でんとする所に。前にミカドの朝廷にありし貴人ども慶びの辭を捧げつゝ立出で來りて、鹿の科人を生埋めにせんと掘穿ちたる土中より、叛逆人が窃み埋めたる二種の神器顯はれ出で、訴人せる息子は助命されたる由言ひ知らせけるが。これに尋きて兄なる息子は従者數多を引連れて、鏡と劍とをミカドに捧げまつらんと凱旋すれば、ミカドの御目も忽ち明らかに治りて、三種の神器を受けて、ミカド

の位に就かせ玉ひたり。○シールホルトが見物したるは大坂の道頓堀角の芝居にて、伊原敏郎君が所藏の文政九年五月の役割番附によれば、此時の芝居は、市川四藏・尾上菊五郎・尾上松助・嵐來芝・大谷友右衛門・中村芝翫等を一座としたるものにして、かなりの當りなりしかば。前の月には「玉藻前晝秋」を合せて興行し、此月には番附通り假名手本忠臣藏・傾城反魂丹・如小松子日遊など合せて五日より興行されたるにて、シールホルトの見物したるは、其三日目なりしなり。此時の見物中に日本畫家鶴翁と云ふ人ありて、和蘭人三名即ちシールホルトと館長・筆者とが觀劇中を畫きたり。其畫は、今白井理學博士所藏せらる。館長は椅子によりて兩脚を足臺に載せたるが、それには白布を被せたり。是れ多紀元堅の時還讀我書に記す通り、江戸よりの歸途關驛を過ぐる時館長が足關節を捻挫したる爲なるべし。但し其書には關驛のことは五月二十九日にありたる様記したり誤りなるべし。

六月十三日 ○我五月八日 友人知人の來訪多し、出發は明日の豫定なり。

### 十二 大坂より長崎への歸旅

概目。肥料の準備。兵庫の町。港。明石と淡路との間の海峡。家島。樹木。船舶の修繕に用立つ場所。鞆港。曳船。高山の植物。上ノ關。樹木。上の關瀬戸。眼險の形狀。輿

シールホルト江戸參府紀行



大坂より長崎への歸路

夫の満足。出島へ歸着。

六月十四日<sup>○我五</sup>正午に我等大阪を去り、舟にて淀河を<sup>アモカサキ</sup>尼崎 Amakasaki へ行く。淀河には魚多し。我等は此川に載りて大阪市の西南及び西を通過したるに、此市の宏大にして人口多きことを最明らかに見得たり。岸は住居の家、荷積の家に圍まれ、繁華にして、われ等の通航も見物人の群集を招きよせたり。諸大名の船、數多碇をおろし、中には盛美と壯大とに挺でたるあり。淀河の一支流たる<sup>アサガワ</sup>安治川 Asagawa の岸に沿ひ、そこに石柳ありて、この地方をして愈々快意ならしむ。至る所平坦にして、砂地なれども、住民の厭なき勤勉に、かくの如く肥饒となれるなり。大阪市よりは屢々特別に作りたる肥料船來る。此肥料は全日本に慣用するものにして、人は之を夏を越して蓄へ、種々の庭木又穀物にさへ灌ぐを常とす。其爲六月・七月・八月は屢々至る所の地方、殊に大都市

肥料船

西宮

の周圍の地方は汚く染されて、我等が明媚なる景色を樂むに甚しき防碍となるなり。尼崎の手前にて舟を捨て、徒歩にて、勤勉に耕作せる平地を穿ちて、<sup>ニノミヤ</sup>西宮 Nishinomiya に至り。我等はそこに一泊す。六月十五日<sup>○我五</sup>我等は西宮を發し、再び前に述べた通りの、驚くべき勤勉にて瘠せたる土地より得たる田畝を通過したり。今は赤き小麥滑な小麥の收穫時なり。彼處此處に稻を栽えて、刈株のならば隴畝はまたも鋤き耕さる。今日は華氏八十八度乃至九十度の壓する如き炎暑にして、所々肥料の臭に汚れたる空氣は猶もそれを堪え難うす。我等は某村にて、入り心地よき茶店に憩ひたるが、その前なる室に杉板に四十個の藩侯の名を書き列ねたるは、この滞留の愉快なるを證明するなり。人目を惹きしは、藁板の上に構へし燕の巢が絲にかゝりて廊下につられ、羽の生へたるばかりの雛のそれに居りしなり。巢は燕の常にする用材にて作られたるが、他の禽の巢の如くに圓くして、家の燕

シールホルト江戶參府紀行



又は壁の燕の巢の如き尋常の形をなさず。余は此燕が八年來その所に巢を構ふと聞けり。正午に近く兵庫 Hiogo に到る。

六月十六日より十八日○我五月十一日十三日向ひ風は我荷物を大坂より此に齎すべき船を滞らしたる故、我上船は數日間延引す。我等は此間を利用して此小市を散歩す。兵庫には十六の町あり。人口は一萬六千。傍に港あるために極めて繁華なり。海員の用具並びに普通の生活品は市中を貫く町通りに、かなりよき小賣店ありて賣る。其他にも甚よき藁席、鑄鐵物を賣りて居るなり。港は市街の東側に凡そ日本の一里程の半弧形をなす。港の中には常に大船小船甚多くあり。港の前には大阪へ赴かんとする無数の船舶を見る。余は世界中何地にても兵庫大阪間の海灣の如く大小幾多の漁船商船が帆揚げて行交ふものありと信ぜず。人は云ふ、日本の第一等の大都にして、毎日一萬隻の船が入航す」と。その數百は海岸の何地よりも目を遮るものなきゆえ望見てそ

れを數ふべし。海岸の一部兩方より砂に被はれたる所にては時としては大船まで建造し又修繕すべく。この船渠は甚名高し。港は總體に八尺の深さありと云ひ、頗る大形の船舶が近く岸に沿ふてあるは其徵なり。兵庫の後には北より南へかなり高き山脈連亘す。大阪より兵庫極近く迄は一帶の平地展開し、摩耶山、高井山○高き山と云ふ意なるかは此海岸の雄大なる防禦壁となりて。此聚散多き港灣にそが存在の基本條件をなすなり。余は我が一行の所用と決りたる船を尋ねしが、そは我等が下關より室へ乗來し船と同じものなり。余は余の植物動物を藏置イソヤくに都合よき場所を見定めしが、その一部分は之を別に備ひたる船に移さねばならざりき。

六月十九日○我五月十四日午後に船に上る。晚に向ひ幸東北の風なるに碇を掲げ、明石と淡路島との間北の海峡を駛せたり。此海峡の水路は深く五十絲にては底に達する能はず。海人は深さ七十絲なりと告ぐ。海



鳴門

底は明石の側<sup>ガ</sup>に巖石より成り、淡路の側に砂より成れり。南の海峡は淡路の西南岬と阿波の東北岸の間に通じ、鳴門 Nanto と稱ふ。音響の門の義にて、激し流るゝ劇しき潮聲よりかくは名づけらるゝなり。六月二十日<sup>○我五月十五日</sup>早朝室の緯度<sup>○我五月十五日</sup>にあり、クロノメートルを以て經度を取る。家島<sup>○原文には Jisima とあれ</sup>淡路は眼中にあり。家島の西點は北より西四十五度にあり、淡路の北點は北より東八十七度にあり、その南點は南より東十四度にあり。海波靜穩となり。日の南中を測る。晩に近く少しく風あり、然も中夜碇を下したり。

六月二十一日<sup>○我五月十六日</sup>早朝室 Muro の緯度<sup>○我五月十六日</sup>にあり。

朝の間に碇を擧げたり。波靜なり。日比半島 Hibi と讃岐國 Sanuki の岸との間なる水道を進む。十九乃至二十絲深く、海の底は多く、砂の地に貝を交へたり。午後に再び碇を下す。ドクトル ビュルゲル 及び余は一つの舟に上り、與島 Jasma に移る。<sup>○原文ヤシマとあれど與島なるべし。日比と讃岐との連線に至れば八島は既に背後にあり</sup>

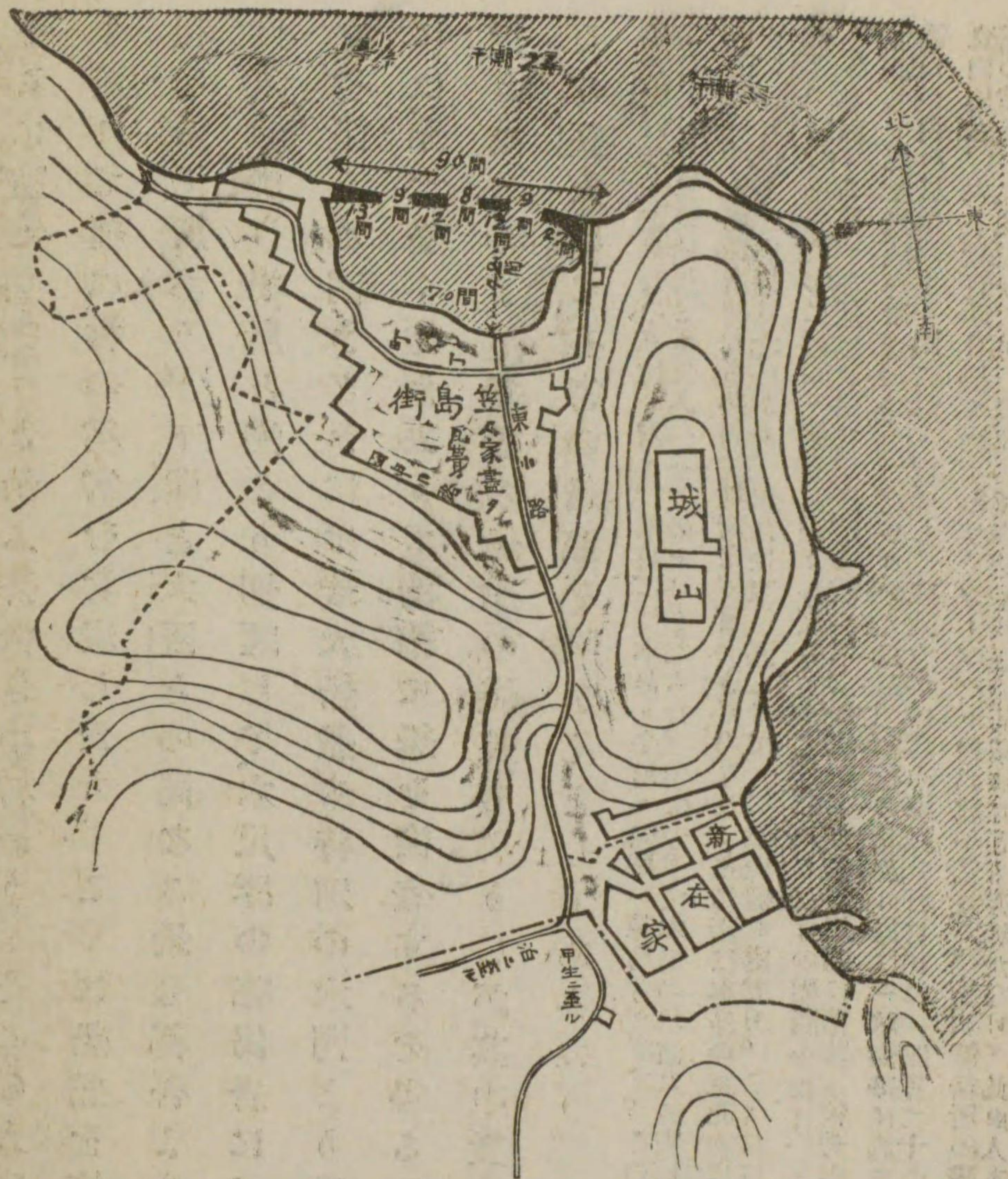
鹽飽の船着所

そこに鹽飽 Siwaku と云ふ甚快き小村あり。その人家は建方よく盡く瓦にて覆ひ、村の稍富むを表したり。こゝに船舶を修繕するに甚便利なる場所あり。下關と大阪との間なる最も都合よきものなり。そは濱の廣き場所と海より切離して、六尺厚の花崗岩にて重壁を築きて之を護り、水高きときには、最大船舶も特別の水門より乗入るべく、退潮には、海水全く乾き去りて、精細に船を検査するを得るなり。(○余等の行きたる時)丁度多數の船舶の艤裝中なりしが、其中數隻は繞りて置きたる藁火にて、有害の船蟲を除かんとしてありたり。

<sup>○岡田唯吉君云。鹽飽諸島は今は本島・與島・廣島・佐柳島・高見島の五村に別れ、本島には本島・牛島・向島・長島など屬す。この島の中なる本島・牛島・與島ともに港には船渠とも云ふべきものありしならむ。中につきて本島の北浦なる笠島港・牛島の北浦なる丸屋等の造船所・同島南浦なる共同造船所など著しきものなり。笠島港は本島の東北端にありて北は一里を隔て、下津井に面し、向島は北にあり、與島は東に連なりて、天然の船灣處なり。こゝには造船所并びに船たて場あり。港口には一文字に堤防を築き、其間々を斷ち切りて船の入るだけの間隔を作り、それより船を入れて輪木(船を載する臺)を船底に當て、干潮を俟つて、船底を検査し、周圍に藁草(笹草等の莖幹を乾かせるもの)を燃して海藻貝類の附着を防ぐ。之をタテ云ふ。其頃の北廻り船は一航海毎に此に來りてタテたりと聞く。港口の模様は第三十八圖に示すが如し。文政六年の寫木海瀨舟行日記に「四月二十七日笠島泊、家百七十五軒東向湊也、大小船百斗り掛る」云あり。シーホルトの記載を見るに、船舶修繕所の構造など今現に存する笠島港の造乘方に似通ひたり。船體の検査法や船底の清淨法なども亦然かなり。此處人々百數十戸ありて、一小區域</sup>

シーホルト江戶參府紀行





(補)港島笠の島本飽鹽 圖八卅第

に纏まり悉く瓦葺なるも亦然かなり。此地方の人々は古來有力なる海部として活動し、足利時代には此地の船人輩貿易船運送船を以て遠くは朝鮮・支那・南洋までへも往來し、織田・豊臣・徳川時代には御用運送船として朱印狀を賜はり居たり。豊臣氏以來島中の物成千二百五十石を受け、彼等の六百十人は幕府のお抱へ船夫として人名(ニジミヤウ)に稱へ、他の藩士に相當し、將軍家綱時代、河村隨賢の推舉にて出羽秋田の藏米を北海廻はり内海よ

り紀遠の灘を江戸に輸送する御用船の中堅たり。而して港の繁昌は文政頃を以て全盛の時代とせり。其後も其繁昌衰へず。幕末には此港口及泊浦(本島の南浦)に幕府の貯炭所を設け、諸軍艦來りて碇泊せりと云ふ。海濱には格別のものなく、二三の白座シロザ、苦菜、茶袋、龍葵、雀麥など、又そここゝに巖を超えて垂れ下がる荆イヌラを見。山岳は花崗石より成り、大塊片として海岸を被覆したり。我等は或山の背に攀ち登りたるに、その花卉はかなり蹙縮イデケたり。松マツ、檜ヒノキ、萩ヒサギ、牛尾菜ウシビロ、薔薇バラなど、すべて極丈矮く、二三尺もなき程にて、羅馬加密列ロマカミツ、夏枯草ホトトギス、鵝觀草カササギ等は雜草に混ざり生じ、數ヶ所には Gonocarpus 及び數種の余のまだよく知らぬ植物あり。我等は一農家に憩ひ、晩に近く船に歸りたり。島はそここゝに耕され、穀類、蔬菜類を産す。

六月二十二日 ○我五月十七日 晩に向ひ備後 Bingo の海岸の方に舟を寄せ、陸に近く半里に碇を下す。

六月二十三日 ○我五月十八日 朝、曳船にて鞆の港 *Hafen von Tomo* に至る。正午近く鞆へ上陸す。美しき位置にありて、出舟入舟の往來に頗る忙はし。

シイゴルト 江戸參府別行



多数の小賣店あり。多分は疊綱(帽)○笠靴(鞋)など海人業業者の扱ふ商品なり。港は東北側にありて。小き日本船に甚有利なる碇泊場なり。北の方には甚堅固なる重壁あり。西南には市と高き山とありて之を防護す。港の前には海深は三絲ばかり。港の中はなほ淺く、余の推考にては歐羅巴の船は入船する能はざるなるべし。されど(○港の外)半哩の距離に於ても同様に安全に停泊すべし。市は長さ十五町にしてよく手入せる住宅は人々の富有なるをあらはし。住民は數千を數ふるならん。我等は數箇の民家を訪ひしに、心よく迎へられたり。某寺を訪ひしに寺は其位置の美きと眺望の開濶なるにて名高く、又朝鮮人の日本の海岸にて難船し漂流したるもの、滞在せしためにてもこれに劣らず有名なり。○廟にて有名なる寺は醫王寺と福禪寺にて。福禪寺には對潮樓といふとき其宿舎に充てらる。韓使の筆にて日東第一景勝と云ふ扁額あり。朝鮮人の難船して滞在せる寺と云ふは明なからず。阿彌陀寺・小松寺などに韓人の墓碑あり。安永三年には蘭人廟ノ沖合なる津ノ石にて難船し、四月四日より八日迄上陸して船を修繕して、同九日に出帆せることあり。○中村吉兵衛君報知。文政四年には清人が紀州熊野に漂着せるを長崎へ廻送する途中こゝに寄航せることあり。○中村吉兵衛君報知。文政九年には前文四三〇頁に記せる如く

遠洲藤原郡下吉田海岸に異國人の漂着せるを長崎へ廻送せることあり。その途中こゝに寄航せり。

高さ數百尺の險崖を登りたる邱の背にあり。○シールホルト何故にただ此寺のみに至りしが福山志料に「廟・地中高く、東

より西はみえず、西より東は遮る物多。此寺西の山麓にあり。東西を一目によき絶景なり」と。その爲なるべし。此山の植物は解溼・松栗・楡・狗・枇杷・躑躅・菜・葛・竹・他の樹に纏ふ葛等なり。余は楡の上に金龜子の形も大ききも全く我邦のに似て、甲と腹との色のそれと違へるを見たり。是れ原來の種なりや、氣候と食物とが此く變化させたるや如何を知らず。晩に舟に歸り。中夜に三十隻の曳船にて港外に出でたり。

六月二十四日○我五月十九日 いまだなほ逆ひ風なり。島より島へと漁船に曳かれて行く。晩に御手洗 *Mitarai* より三哩離れて碇を下す。中夜満潮

御手洗

に乗じて曳かれて進み、前述べたる海峡を通りて御手洗の浦に停泊す

六月二十五日○我五月二十日 御手洗の町より數名の病人來り、余の診案を求む其中に十七歳の少女あり。母の言によれば、時として淫亂症の發作起るといふ。余は母に對し、食養生と心理的處置との他に、娘を早く結婚

シールホルト江戸參府紀行



さずることを提議したるに、少女は喜ばしく微笑て之を肯ひたり。精神病の病狀に國民的習慣の現はるゝ様如何は注目に價すべく。此少女は發作の時、この地にて夫ある婦人一般の標徴とする如く、齒を黒く染むると云ふ。幸よき東風は晩に涼しく吹初めれば、西して河室島の傍に碇を下す。夜強き風に驟雨を伴ふ。朝三時近く暴風は東より、島地の側より吹く。

六月二十六日 ○我五月二十一日 はまだなほ強き風と雨とあり。地平線は全く覆はれたれば、陸地を見分けて航路を探ること(是れ此地を航行する日本人の唯一の方法なり)難し。午後になりて空少し霽れたれば、帆を揚げて進み。晩に上ノ關瀬戸 Meerenge Kaninoseki を穿ちて。上ノ關港に駛す。晩も夜も烈き風あり。氣壓計は是迄常に十八分一秒二歩なりしに、二十七秒に墮ち、寒暖計は六十九度、溫度計は五十五度なり。六月二十七日 ○我十月二十二日 幸惡き風。天氣はよし。碇を下し停泊す。十時

上ノ關

近く余はドクトルビュルゲルと陸に上る。上ノ關 Kaninoseki を巡り覽る。小き市にて人家凡そ二百五十、住民二千。港は風當てず。舟多く集りて、住民に豊富の食物を給す。阿武免の觀音 Abudono Kwanon を祀れる寺にて、國主の指令を待てり

○上ノ關村字中町に踊山超專寺といふ寺あり。元々元年保十年・寶曆七年・明和元年など、和蘭人參詣の記録あり。享保十年には出島の領醫ケテラール館長に從ひ來れり。又寶曆七年和蘭人の寄進せる煙管・拂子・硝子瓶二本等あり。煙管は今其箱のみとなり、拂子は箱のなきものなり。なほ關字にて寺名及び秀海(僧の名)と書せる紙あり。此寺の記録は頗る豊富なり。文化文政年間に関するものなし。此頃の住職は道冠寛政六年(弘化二年)といふ。(以下數項も、周防國熊毛郡役所報)寺の住僧が禮儀恭くこの季節の蔬菜を贈呈したれども、我使節がこれを辭退せし故、我等は住僧の度々勧めたるに拘らず、觀音に詣づるを遠慮して控えたり。こゝ十六年は和蘭人の此寺に詣でしものなかりしが、嘗て下したる君侯の來客を厚遇すべしといへる命令は、今も猶嚴に守られたるなり

○十六年前とは文化七年頃のことなり。此時の和蘭商館長は有名なる甲比呂ツーフ守廣鎮にして、上の關代官役は内藤五郎兵衛廉常なり。隨行 筆者ホセマン醫師フェールケなり。その時の領主、徳山、毛利日向我等の今受けたる經驗によるに、將來もかゝる懇切なる款待は維持さるべきや如何、疑はし。我等は一ツの茶亭に憩ひ



たるに、世話好きの人にて村尾善十郎 Murawoze Jorowō ○當地の人にて浦上春琴の門人にして村尾善五郎といへる人あり。春屋と號し、此地の瀬戸口なる住吉神社の裏に住ひ、後に京都にて歿し、墓も同地にありと云ふ。善十郎とは或は善五郎の誤りならんか。京都には其人其墓所を知る人なし。といへるが、余等を上ノ關近傍の山地 ○上ノ關村字村山 に案内せり。邱陵の背も谷も少しく耕されて、現在蠶豆小豆を植ふるのみ。我等の登りし邱上の植物は杉荒檜、柯仔菜、黄合差草、三手楓、檜木、斛葛などにて、金粟蘭、蠅毒草、其他數種の花咲かぬ益草雜草は混生し。それより高地には躑躅類、松類 (Pines andromeda) を見たり。或る邱の頂にて、余は數個の石を積累ねて記としたる一の墓塚あるに驚きたり。信長時代に六人の戦士が小責合にて斃れたるを葬むれるなりと云ふ。余は此の素朴なる墳墓が花咲く躑躅の枝、柔き松の莖に飾られて數百年の後までも勇士が鄙しき村人の追慕するところなるを見たり ○今も六人塚といひて残り。織田信長時代の。我案内者は上ノ關瀬戸の出口なる某園に案内したるが、○天和年中に制定されたり。其頃は御茶屋と稱し、藩主巡行、際に宿泊せる所なり。今は庭園の跡方もなければ、村、毛利侯の別第云ふ。長崎行役日記に「周防の上ノ關につく、右にせんばか嶽あり、岩石の上青松屈曲畫、如し、左の島に長

門侯の茶屋あり。左右の海岸人家比々たり。その間舟道にて、甚だ奇絶の處なり。余はそこにて彼の筆なる數個の畫圖を見て、彼に上ノ關と海峡との圖を作ること求めたるが、暫くして余は之を得たり。余等は尋ぎて舟に歸り。午後に小舟にて海峡に赴き、その深さを搜る。諸方面に探り、絲を投げ、それによりて退潮の初まるとき、水流は海峡の中央にて五六絲、巖なる兩岸近くは二三絲、港に近くは七乃至十絲又は猶も深きことを知りたり。之によりて考ふるに、こゝは歐羅巴の船にも適好の停泊地なれば、船をここに入るを可とす。此地の舟人は何れも水先案内として船を四國の西南角と九州の東北角とを望み得べき高地へと導くべし。我等は次に日本○本土の西南側なる室津を訪ふ。上ノ關に比べては訪ふ人も少なき小村にして、民家は總體に作り悪くして、住氏の貧窮なるをあらはす。我等はこゝにて我船より呼ばれて、これに赴きたり。我船は使節の催促にて今晚にも帆を揚ぐるなり。されど、風弱くして曳船によりて纔に進み行くの

5  
4



み。夜に入りて我等は少しく進みたり。九州の我眼界に入る頃、經度觀測の好機會を得たり。

六月二十八日

○我五月二十三日

岩見島 Iwanisima

○原本にはいはいはくしまとあり、<sup>印</sup>は祝島三島ならん(明治三年古名にかへる)

mesima の正午緯度及びコンパス觀測をなし、之により我が下關より甚遠くはなきを知る。姪島はファンデルカペルン海峡より來り、四國九州の間の海峡を通りて、高き海上に航し去らんとするものに取りて、最も確かなる指碇となり、其鶴崎 Kap. Tsunusaki はずうつと前より分明に見とめべくして、同じく其目的のため、確たる着眼點となるなり。姪島の同緯度にて、此島の東角を回航すれば、高き海に出づる航路は誤るべくもあらず。我舟が其航路に進むとき、若し夜に入ることあざらば、そのスケッチを取ることはずなるべければ、余はなほ遠く手前より輪廓を描寫せんと試みたり。内裡の山 Berg. Dairi. 御崎 Misaki ○宇部の岬なり及び本山 Motojama の地角 ○本山 (本山は余は紐山 Himojama を目標として

北西六十八度に指點したりは船を入るゝによき着眼點にして、初めには西に後には北によりて進むなり。長門 Nagato の地方の山々と紐山との間は海峡の入口なり。余は日本人は船にて屢々下關に往來すれば、余はこれを此間の最も好き水先案内なりと信ず。我等は夜を徹して帆の下にあり。夜の暗にて余はコンパス觀測をなし得ざりしを遺憾とす。壇ノ浦より凡そ一哩に余は鉛線を下して四乃至四五絲を得たるが、海峡に向ひて海は次第に深くなり。海門には潮流強く、そのため早く驅られて、我等は纔に三回鉛線を投げ入れ得たるのみ。之によれば深さは六・五乃至七絲なり。朝になりて後、早くも余の門人たちに海峡の深さを各方面に於て精密に測量することを委囑し、余の地圖に記入したり。我等は午後二時後に下關の埠頭に到り、五絲の深さに碇を下したり。余は陸に上り。前の船にてここに送りし動物及び生きたる植物が皆よき状態にあるを見たり。

5  
4



下關

小倉

六月二十九日 ○我五月二十四日 ファンデルカベルレン海峽の原圖を受領す。余の友人どもを訪問す。下關 Simonoseki に關する報告を作る。

六月三十日 ○我五月二十五日 午後小倉 Kokura に渡る。此渡津に關する報告を作る。出来るだけ多く鉛線を下す。

木屋瀬

七月一日 ○我五月二十六日 小倉を發して、前に記したる景色の佳き地方を過ぎたるが、その植物分布の状態は前々の日に通過したる島々とは大に相違す。稻田多く。こゝにては今頃稻を植え初め居たり。午後に木屋瀬 Kojanose に到り、晩に飯塚 Ienaka に宿す。

七月二日 ○我五月二十七日 夜明に出發し。池田山 Geringe Iketa・寶滿岳 Honantake を通過す。麓と巔とにて、古き慣例に従ひて、酒を飲む。主人は先に此山岳の稀有なる植物を採集する様約束しながら、正直には守らず、纔か數種の灌木を呉れたるが。その中には稀有なる瑞香ありたり。小倉以來心地勝れざりしかば、九十度の暑熱に自身此山の草樹を捜査する

婦人の眼

を得ざりき。乗物より觀察する所にては、九州に有觸れたる山岳植物以外特別なるものなし。余の門人高良齋 W. G. G. は山中を搜して數種の植物を齎したるが、それは余が既に日本 ○本土 にて見しものなりき。或る村に於て一婦人の眼瞼の異なる形成は余の注目を惹きたるが、余が前に「鼻骨の陥りたるが、そこを幅廣く見せ、上眼瞼をして下眼瞼を踰えて引下がらしむ」と云へる説に、又一の證左を與へたり。但し此婦人には上眼瞼は下眼瞼を甚しく押し込め、眼球の爲めたゞ小き破裂を殘すのみにて。余は遠くより此婦人を見て盲者と思ひたり。我等は旅を續けて、山家 Yamaga を過ぎ。晩に身内 ミウチ は甚暑くなりて、田代 Tasino に着す。

七月三日 ○我五月二十八日 我等は夜明に我旅宿を出でしが、昨夜は無數の蚊の爲め少しの安息を享けたるのみ。此生物が五月蠅くして人を惱ますは殊に稻田に近き土地に於て、その感をなすなり。我等は今肥前ノ國

5  
4







その戲言的會話は我れ等を題材とすること多きなり。われ等は賤き日本人に取りて屢々その驚異となるも、又屢々笑ふべく興ずべくも見ゆるなり。我等は柄崎 Tsukasaki にて晝飯を取り。それより三坂峠 Sasagatoge を穿ちて、嬉野 Uresino に至る。高き山の背には一體に雜草及び丈低き灌木生ひ。之は小萱刈、蘆粟、野木瓜、牛尾菜、野葡萄、薔薇、柵、萩山、楊、豇豆類、畸形の松、夏菜、莧、柃木、莓、馬棘、胡豆、其他數種の灌木様草樹なり。或る村に至る前にて葬式に出會す。一兒の今痘瘡にて死したるなり。晩に嬉野に宿す。茶の栽培にて有名なり。

嬉野

七月五日○我六  
月一日朝、山地にかゝる。徒歩者には心地よけれど、擔夫、馱馬には難澁なり。嬉野より有名なる樟の老樹ある所に至り。此に小憩す。余は吾が畫師を先にやりて、此珍らしき樹のスケッチを作らしむ。○前  
一八二頁参照ケンブエル。  
も此大樟につき記せり。我等はそれより彼杵 Sogabe の低地に下りて、大村灣 Bai Omura の佳絶爽絶なる景色を望む。彼杵にて午食し。それより

彼杵

海岸に沿ひ、大村へ旅を續く。壓する如き炎暑なり。寒暖計はこゝに海風の吹くに拘らず九十度に上る。昨日今日通過せし山脈は至る所に火山的動亂の象を具へ、古き標徴ある他に硫黄もあり、泡吹きたる様の玄武石の岩片もありて、それと知るべし。その山々は皆邱とも云ふべき程のものにて、植物に豊富なり。長崎近傍の同じ高さの山々に見るものと同じ。

大村

我等は甚早く大村に到り、出島の諸友人より愉快なる報知を得たり。諸友何れも皆健康にして、我等を慕ひて待ち詫ぶと云ふ。大村は四十の町内ありて、人口は十一萬に近しと云ふ。城池あり。  
七月六日○我六  
月二日我等は朝に長崎より迎へ來りし友人たちとともに諫早 Isahaya に向ひ出發したるが、迎ふる人々は村一村毎に其數を加へたり。矢上村 Dorf Jagami にて夜泊す。こゝにて我等の荷物は、たゞ形式的に臨檢せられ、我檢使これに封印を施し。我等は懷中に使ひ残りの

55  
41



大坂より長崎への歸路

現金はなきやと問ひ質なされたり。我使節に對しても、彼の小箱に數千の取引書類を入れたること分りて、之を公けに納めしめたるが、是れ從來嘗てあらざりしことなり。

七月七日○我六今日正午に近く遂に同郷の人々に迎へられて、凡そ五ヶ月不在の後、恙なくこの難澁なる旅行を了りて、再び我使節の甚戀ひ慕ひたる出島の我牢屋に歸れり。荷藏長 Pakhuismeester ○フアンオーヘルメル、フイツシヘルバ Overmeer Fischer として、文政三年より九年間我邦に在りたる和蘭商館の次席の人なり より使節に皇帝の旅行免許狀 ○和蘭人渡來の朱印狀 を入れたる古き樟箱の鍵と彼節 ○使 の日記簿とを渡したり。(完)

異國叢書

シーボルト江戸參府紀行

非賣品

昭和三年一月十五日印刷  
昭和三年二月二十日發行



譯註者

吳 秀 三  
東京市小石川區駕籠町二四九番地

發行者

奧 川 榮  
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一

印刷者

田 中 常 太郎  
東京市小石川區堀口水道町四番地

發行所

東京市京橋區南八丁堀  
一丁目十一番地

駿 南 社

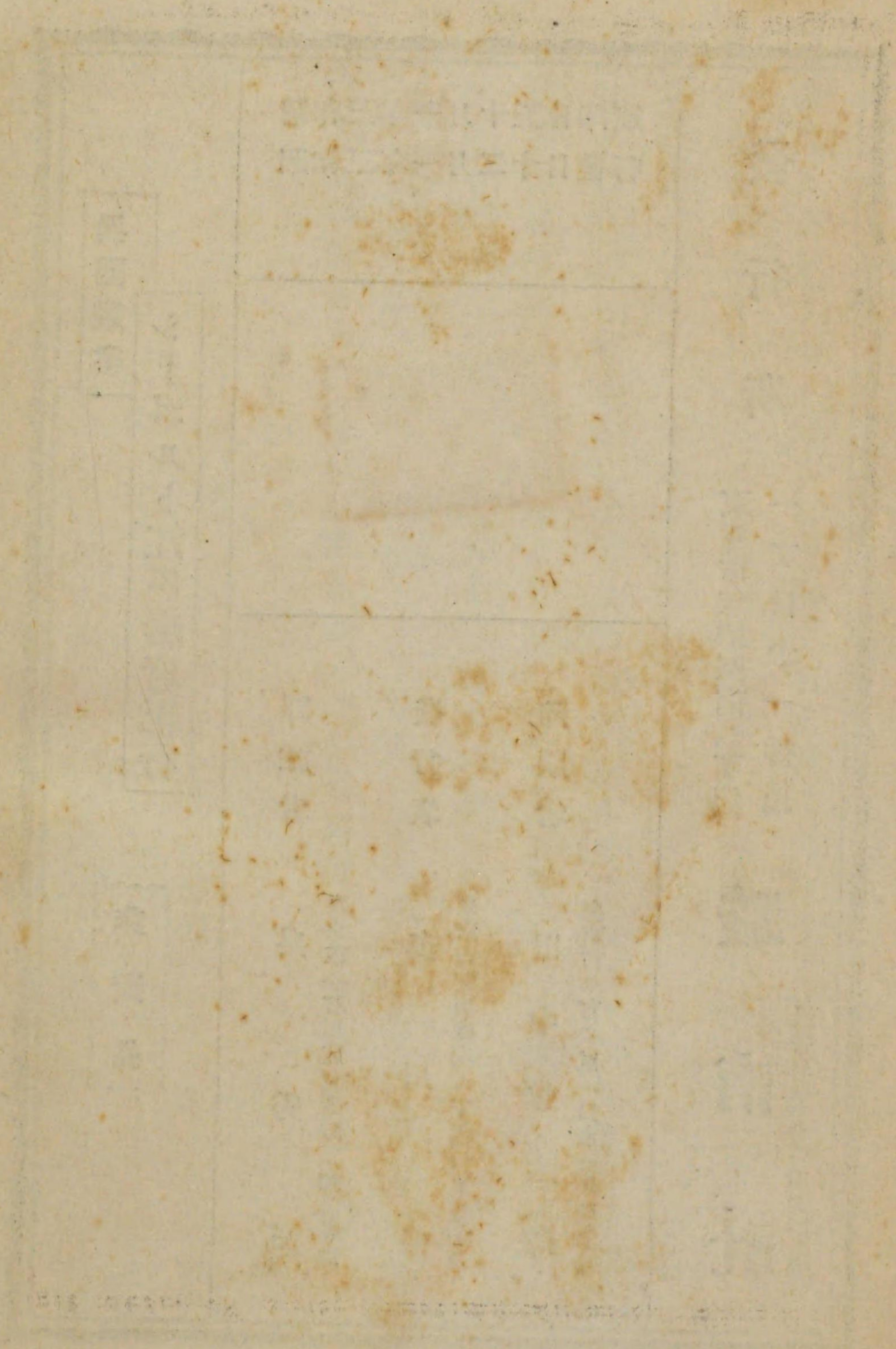
振替東京(七五四四)番

553  
47



555  
47

43





555

474



555  
474



